

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総括研究報告書

高次脳機能障害の障害特性に応じた
支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究

研究代表者

深津 玲子：国立障害者リハビリテーションセンター病院 第三診療部長

研究要旨

本研究は、高次脳機能障害者に対する支援者養成研修のカリキュラムおよびテキストを開発し、同障害者への適切な支援につなげることを目的とする。研究2年目である令和3年度は、昨年度作成した研修カリキュラムおよびテキストを用いて6月に国立障害者リハビリテーションセンター学院にてオンライン研修会を開催、その結果をもとに基礎編および実践編のテキスト改修を行い、基礎編テキスト第2版、実践編テキスト第2版を作成した。研修カリキュラムの構成は昨年度と同様で、基礎編と実践編、各12時間（6時間×2日間）、どちらも講義（40分×9講座）と演習（基礎編は90分×4、実践編は180分×2）とした。基礎編の講座は、障害定義、診断評価、医学的リハビリテーション、失語症とコミュニケーション支援、制度利用、相談支援、生活訓練、復職・就労移行支援、生活と支援の実際、診断・評価体験、退院時支援の実際、生活訓練の実際、復職・就労移行支援。実践編の講座は、支援体制、発達障害・認知症との共通点と相違点、小児期における支援、長期経過とフォローアップ、多職種連携、家族支援・当事者家族会の活動、地域生活支援の実際、支援の実践的な枠組みと記録、自動車運転再開支援である。それぞれの講座に分担研究者、研究協力者を担当者とし、シラバスを作成したうえでテキスト第2版の執筆を行った。テキスト第2版を用いて、5回（所沢市、三重県、名古屋市、千葉県、高知県各1回）試行研修を実施した。今後試行研修の結果を還元し、さらにテキスト改修を進め、また支援拠点機関と共催で研修会開催を重ねることで、支援者養成研修のパッケージ化を進めたい。

研究分担者

立石雅子：日本言語聴覚士協会 副会長
青木美和子：札幌国際大学人文学部心理学科
教授
上田敬太：京都光華女子大 教授
渡邊修：東京慈恵会医科大学 教授
鈴木匡子：東北大学 教授
廣瀬綾奈：千葉県千葉リハビリテーションセ
ンター 科長
浦上裕子：国立障害者リハビリテーションセ
ンター病院 リハビリテーション部長
今橋久美子：国立障害者リハビリテーション
センター研究所 室長

研究協力者

片岡保憲：脳損傷友の会高知青い空 理事長
古謝由美：日本高次脳機能障害友の会 監事
守矢亜由美：東京都心身障害者福祉センター
地域支援課 高次脳機能障害者支援担当
鈴木智敦：名古屋市総合リハビリテーション
センター 副センター長
瀧澤学：神奈川県総合リハビリテーションセ
ンター 総括主査
佐宗めぐみ：相談支援「楽翔」管理者
小西川梨紗：滋賀県高次脳機能障害支援セン
ター 臨床心理士
コワリック優華：滋賀県高次脳機能障害支援

センター 看護師

稲葉 健太郎：名古屋市総合リハビリテーションセンター自立支援部 就労支援課長

熊倉 良雄：国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局 室長

安部 恵理子：国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局 作業療法士

石森 伸吾：国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局 主任

山舘 圭子：栃内第二病院 臨床心理士

小島 一郎：名古屋市総合リハビリテーション事業団瑞穂区基幹相談支援センター 所長

A. 研究目的

高次脳機能障害の支援については、障害福祉制度の整備は進んだが、同障害の特性に応じた支援が現場で十分行われているとは言えない。この課題に対応するため、申請者は平成 30、令和元年度厚労科研を用いて「高次脳機能障害の障害特性に応じた支援マニュアルの開発研究」を実施し、その一環として、支援の実態調査及び分析を行った。結果地域の障害福祉事業所の利用は増加しているが、高次脳機能障害者の支援経験が無い／少ない事業所が大半であり、一方でこれまで支援経験のない事業所の 7 割が同障害の知識・情報を習得し、スタッフの支援体制を整えば同障害者の利用を受け入れたい、と回答した。このことから障害福祉サービス現場の支援者養成が喫緊の課題であることが明らかとなった。本研究は、高次脳機能障害者に対する支援者養成研修のカリキュラムおよびテキストを開発し、同障害者への適切な支援につなげることを目的とする。高次脳機能障害に対応可能な支援者を増やすことで、同障害者が住み慣れた地域で生活を営める体制整備の推進を図る。

B. 研究方法

1) 先行する各種養成研修について情報収集および分析を行う。

2) 1) を参考に基礎編および実践編カリキュラムを作成する。

3) カリキュラムに沿って、テキストとシラバスを作成する。

4) 試行研修を繰り返し、受講者アンケート等の結果に基づいてカリキュラムおよびテキストを修正する。

昨年度 1) 2) 3) を実施し、基礎編テキスト第 1 版を作成した。今年度は昨年度未完であった実践編テキスト第 1 版を完成し、4) を実施した。

(倫理面への配慮)

研修テキストには、個人が特定されるデータは使用しない。事例報告等を行う場合は、所属機関の倫理審査委員会の承認を得たうえで、インフォームドコンセントを徹底し、対象者及び家族の同意を得る。また、個人が特定できないように格別の注意を払う。加えてコンピューター犯罪のリスクを完全に防御されるよう最大限の努力をする。

C. 研究結果

1) 先行する養成研修の情報収集と分析：強度行動障害、ホームヘルパー、ガイドヘルパー、障害福祉従業者等の養成研修の実施要項を集め、対象、参加要件、時間数、講義・演習内容、受講のメリット等を比較した。

2) 研修会基礎編および実践編カリキュラム作成：1) の比較結果に基づき、研究分担者、支援拠点機関、行政、当事者団体等との意見交換を行い、基礎編と実践編、各 12 時間 (6 時間×2 日間) のカリキュラムを作成した。どちらの研修も講義 (40 分 x 9 講座) と演習 (基礎編は 90 分 x 4、実践編は 180 分 x 2) の構成とした。基礎編の講義 9 講座は、障害定義、診断評価、医学的リハ

ビリテーション、失語症とコミュニケーション支援、制度利用、相談支援、生活訓練、復職・就労移行支援、生活と支援の実際、演習4講座は、診断・評価体験、退院時支援の実際、生活訓練の実際、復職・就労移行支援。実践編の講義9講座は、支援体制、発達障害・認知症との共通点と相違点、小児期における支援、長期経過とフォローアップ、多職種連携、家族支援・当事者家族会の活動、地域生活支援の実際、支援の実践的な枠組みと記録、自動車運転再開支援である。それぞれの講座に分担研究者、研究協力者を担当者とし、シラバスを作成した。

3) 基礎編および実践編テキスト作成：本年度6月国立障害者リハビリテーションセンター学院で開催した高次脳機能障害支援関係者研修会で基礎編テキスト第1版を用いた。その結果をもとに、基礎編テキストおよび実践編テキストの改修を実施し各講座の担当者が第2版を作成した。各講座の担当者は下記の通り。基礎編；障害定義（深津玲子）、診断評価（鈴木匡子）、医学的リハビリテーション（渡邊修）、失語症とコミュニケーション支援（立石雅子）、制度利用（今橋久美子）、相談支援（瀧澤学）、生活訓練（安部恵理子）、復職・就労移行支援（稲葉健太郎）、生活と支援の実際（青木美和子）、演習4講座は、診断・評価体験（深津玲子）、退院時支援の実際（瀧澤学）、生活訓練の実際（石森伸吾・安部恵理子）、復職・就労移行支援（稲葉健太郎）。実践編；支援体制（深津玲子）、発達障害・認知症との共通点と相違点（上田敬太）、小児期における支援（廣瀬綾奈）、長期経過とフォローアップ（浦上裕子）、多職種連携（小西川理紗）、家族支援・当事者家族会の活動（青木美和子）、地域生活支援の実際（立石雅子）、支援の実践的な枠組みと記録（小島一郎）、自動車運転再開支援（熊倉良雄）で各担当者が執筆した。演習2講座は、ロールプレイを取り入れた障害特性の理解と対応（山舘圭子）、アセスメントと計画立案（渡邊修・今橋久美子）とした。基礎編テキスト第2版は完成、実践編テキスト第2版はおお

よそ完成しているが、一部未完成であり、来年度引き続き作成する。4) モデル研修および受講者アンケート：令和3年度に6回（所沢2回、三重県、名古屋市、千葉県、高知県各1回）試行研修を実施した。本年度6月に所沢市で実施した国立障害者リハビリテーションセンター学院研修では基礎編カリキュラムおよびテキストを用いて、講座担当者（執筆者）が講師を務め、オンラインで実施した研修の受講者アンケート（受講者数174名、回収者数116名（回収率66.7%））では、全体評価は、①非常に良い31.9%、②良い60.3%、③普通6.9%、④悪い0.0%、⑤非常に悪い0.0%、⑥未記入0.9%であった。自由回答として、「初心者にわかりやすかった」「講義は動画で配信してほしい」などが挙げられた。その他の研修会では基礎編あるいは実践編の一部講座をテキストを用いて自治体、当事者家族会が実施した。

D. 考察・結論

今年度は基礎編および実践編カリキュラムとテキストの試案を開発し、新型コロナウイルス感染の状況に鑑み、その仕様をオンライン研修用にも編集した。

本研究は、神経内科学、脳神経外科学、リハビリテーション医学、神経心理学、社会福祉学等、分野横断型の取り組みであり、高次脳機能障害者・児の生活支援を多角的にとらえて補完しあい、社会への還元を目指す試みである。障害特性に応じたサービスを提供できる人材の育成は、社会的要請に基づく課題であり、その成果は障害福祉行政施策に直接寄与するものである。

4) その他特記すべき事項について なし

F. 健康危険情報 特になし

G. 研究発表

・論文発表

1. Ubukata S, Ueda K, Fujimoto G, Ueno S, Murai T, Oishi N. Extracting Apathy From Depression Syndrome in Traumatic Brain Injury Using a Clustering Method. J Neuropsychiatry Clin Neurosci. 2021 Nov 19: appineuropsych 21020046. doi: 10.1176/appi.neuropsych.21020046. Online ahead of print. PMID: 34794328
2. 渡邊 修：高次脳機能障害に対するリハビリ療—患者・家族会との連携—リハ医学 58(4):418-427. 2021
3. 北村理恵, 立石雅子, 小田柿誠二, 渡辺望, 近藤国嗣：慢性期失語症者に対する代償手段獲得訓練について。—描画とジェスチャーを用いて— 高次脳機能研究. 41(1):13-21. 2021
4. 浦上裕子, 山本正浩, 北條具仁ほか. 記憶障害が遷延した右尾状核出血に対するリハビリテーション. 高次脳機能研究 41(1):45-53. 2021
5. 今橋久美子, 立石博章, 小西川梨紗, 宮川和彦, コワリック優華, 森下英志, 粉川貴司, 平山信夫, 深津玲子. 指定特定相談支援事業所および指定障害児相談支援事業所における高次脳機能障害者・児への支援状況報告. 高次脳機能研究 41(4): 421-426. 2021

・学会発表

1. 渡邊 修：交通事故後の脳外傷者に対するリハビリテーション治療（教育講演）第58回 日本リハビリテーション医学会学術集会. 2021年6月10-13日 京都
2. 青木美和子：【シンポジウム 「フィールドワークでの経験と研究」】 「フィールドの調査者から参加者へ」 日本質的心理学会第18回大会 with ソウル 2021年10月23、24日 WEB

3. 鈴木匡子： “高次脳機能障害を” 見える化” する試み 第62回日本神経学会学術集会 2021.5.19-22 京都

H. 知的財産権の出願・取得状況 なし